

学 力 確 認 結 果 の 要 旨

報告番号	理工論 第 72 号	氏 名	味喜 大介
審査委員	主 査	小林 哲夫	
	副 査	仲谷 英夫	山本 啓司

平成27年2月5日、午後1時00分から行われた学位論文発表会において、審査委員を含む約15名の前で学位論文の内容が説明され、その後、以下に示すような質疑応答が行われた。いずれについても満足すべき回答を得ることができた。

Q：試料採取方法を具体的に説明してほしい。

A：試料の採集では、露頭や試料の状況に応じて適切な方法を選択する。たとえばドリルとハンドの使い分け、あるいは方位付けに適した位置を選定するなどの工夫をしている。

Q：磁気コンパスでの方位付けに溶岩の磁化の影響はないか？

A：集中観測で磁場の測定をしたが、測定された偏角に場所による差がほとんど認められないため、溶岩の磁場の影響はないと考えている。

Q：他の火山で同様の方法による適用例はないのか？

A：口永良部新岳溶岩では、9世紀後半から11世紀という古地磁気学的年代を得ている。

Q：地理的にどの程度の範囲まで、この方法による年代測定が可能なのか？

A：日本各地で採取した広域テフラの古地磁気方位や、朝鮮半島で得られた考古地磁気永年変化が地心双極子磁場と整合的であることから、日本国内であれば可能と考えている。

Q：有村地区の文明溶岩は測定したか？

A：露頭が崖の上で定方位試料採取が困難なため実施していない。しかし産状、岩石の記載岩石学的特徴や化学組成の特徴なども、文明溶岩であることを示唆している。

Q：北岳溶岩の化学組成のばらつきが大きいのはなぜか？

A：北岳溶岩の組成幅は一般には小さいが、すべての溶岩のデータを7.5 kaの噴出物としてプロットしたために、全体として組成幅が大きく表現されてしまっている。

Q：より古い北岳の溶岩に同じ方法を適用することは可能か？

A：現在のところ、示準となる地磁気永年変化が十分明らかにはなっていないので、詳細な見積りは困難と考えている

なお、語学力については、専門に関する学術論文の英文和訳の課題を与え、適切な和訳がなされていることを確認した。よって審査委員会は、申請者が博士（理学）の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと判定した。